

進撃異世界かるてっと

ラルク・シェル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アインズ達とカズマ達とスバル達とターニャ達がやつて来たのは、人間と巨人が一緒
に住む世界。そこで巨人を憎む少年、エレンと知り合つてどんなドタバタ学園生活を過
ごすのか。

pixivとマルチ投稿です。

目 次

にゆうがく、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
じこしようかい、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
にゆうがくしき、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
ぶかつ、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
ひきこもり、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
せんぱい、進撃学園	———	———	———	———	———	———	———
きゆうぎ大会、進撃学園その1	———	———	———	———	———	———	———
	60	43	34	26	16	7	1

にゅうがく、進撃学園

これは2つの世界で起きた事。

まずはこの素晴らしい世界に祝福を！の世界。一軒の屋敷では見た目が普通の少年、佐藤和真と水色の髪で全身ベトベトの美少女アクアと、眼帯をした中二病全開の少女めぐみんと金髪で甲冑の美女ダクネスが揉めていた。

「だから押させてよ！押せば何かわかるでしょ！」

「こんな変な押すなって！」

それは屋敷の前に拾ったボタンをアクアが押そうとしたので危険だと言つてカズマが止めていた。するとめぐみんとダクネスがボタンの前に来る。

「うふふふ、たしかに危険だな」

「めぐみん？ダクネス？」

「しかし危険だからこそ。押さなければならないのだ！」

「えっ！ ちよっ！」

和真は慌てて2人を止めようとしたが、聞かずにボタンを押した。

それからオーバーロード世界のナザリツク地下大墳墓。玉座の間ではスケルトンで

オーバーロードのアインズ・ウール・ゴウンが、各階層の守護者達。アルベドとシャルティア・ブラッドフォールンとアウラ・ベロ・フィオーレとマーレ・ベロ・フィオーレと、コキュートスとデミウルゴスが話をしていた。

「という訳でして、今後は何か不審な物を見つけた時は不用意に触らずに報告するようですね」

「そうだ。ほんの一瞬でも気の緩みを許せば、ナザリックの危険となる」

「分かりました。さすがアインズ様、素晴らしい考え方」

デミウルゴスとアルベドは、アインズの提案に賛成した。

「なんだか、本当に会社みたいになつて來たな。そうだよな…ほうれんそうの考えは大切にしなくちゃならないし」

かつて社会人でサラリーマンだつた頃の事を思い出したアインズは、そのまま玉座に座つた。しかし玉座にいつのまにか、ボタンが置かれてたのに知らずに押してしまう。

「ん？ なつ、なんだあああ！」

時すでに遅し、空間がねじり始めた。

「ん…あれ？」

目を覚ましたのは日本の町並みが広がり、後ろには学校らしき建物があるが、なぜか

高い塀＝壁に囲まれていた。

校門には【県立進撃学園高校】と銘板が書かれてる。

「ええええええええええええええ！」なにここ？！」

「どうやら別の世界みたいですね」

グラウンドにはAINZ達が立つていて、この状況に驚いてしまう。しかしDEMIWUL GOSは冷静に状況判断をした。

「まさか、異世界転移か？と言ふよりも…なんで学ランなんだ!?」

今彼らは制服姿になつていた。

AINGZとDEMIWUL GOSとCOKYU-TSは学ランだけど、ALBEDOとSYALTEIAとAWRAとそれからMARLEはブレザーの女子制服。当然、なぜか持つていたカバンには教科書と筆記用具と弁当が入つている。

「あの～～～すみません」

「ん？」

声をかけてきたのはALBEDO達と同じ制服のAKUA。

近くには同じくこの世界に転移してきたKAZMA達がいて、もちろんAINGZ達と同じ学ランの制服姿。

「此処つてどこですか？教えてください」

「すまないが、私も分からぬ」

「はっ!?」

振り向いて答えるアインズだけど、アクアはスケルトンのアインズに驚く。

一方カズマはこの世界の状況に戸惑っていた。

「元の世界に戻つて来たのか？でもちよつと違うし…そしてなんで制服なんか」

「カズマ、カズマ！」

アクアに呼ばれて顔を向けるカズマ。するとアクアは慌ててアインズ達に指を刺す。

「あそこにいるのアンデッドよ！女神の私が浄化してやるまでよ！」

「しかもモンスターの大軍！あああ、このまま私達は奴らに蹂躪されてしまうのか」

「うふふふふ、ならば私の爆裂魔法を披露時が来たようです」

「待て待て、まずは状況整理を！」

アクアはすぐに警戒してダフネスは変な妄想をしてめぐみんも魔法を発動しようと
するので、すぐにカズマは3人を落ち着かせ始めた。

ちなみにアインズ達は彼らの印象を「変な奴らだな」とのこと。

「あれ？お前達も新入生か？」

「「「「え？」」」

すると茶髪の少し鋭い目をした少年と黒髪でマフラーの無表情な少女が、アインズ達
とカズマ達に声をかけた。

それからアインズとカズマ達は言われるままに1年4組の教室に入ると、そこには既にほかの生徒もいる。

しかしその内、小柄のどつからどう見ても幼女が混じっていた。

「一体何だココは？」

金髪の幼女はターニャ・デグレチャフ。彼と自分の部下のヴィクトーリヤ・イヴアーノヴァ・セレブリヤコーフとマテウス・ヨハン・ヴァイスとヴォーレン・グラントとヴィリバルト・ケニーツヒとライナー・ノイマンと一緒に幼女戦記の世界から転移してきた。「思い出せたしかマッドサイエンティストの実験に無理やりつき合わされて」

ターニャは彼女が最も恐れる相手。帝国軍魔導技師のアーデルハイト・フォン・シユーゲルが開発したエレニウム九八式改の実験で、暴走したので非常用停止ボタンを押した結果、なぜか制服姿で4組の教室にいて机に座っていた。

「これも存在Xの仕業か？しかし誰もバケモノみたいな連中がいるのに、あの4人以外は気づいていないんだ」

異世界転移組にはアインズ達は普段の姿として見えてるが、この世界の住人達には彼らは普通の人間に見えた。たとえば、アルベドやデミウルゴスは羽や角や尾が無くて、アウラとマーレはエルフ耳ではなく普通の耳。アインズは現実の人間の姿で、コキュー・トスは身長が190cm近くのガツチリ体格の青年で、シャルティアは普通に健康的な

肌をしている。

「ほら、ここが俺達のクラスみたいだぞ」

「サンキュー、ジヤン！ 良～～し。ここで学園生活を過ごすぞ！」

また教室に入つて来たのは、茶髪のチャラ男とそばかすをした少年と、黒髪で三白眼の少年と銀髪ロングのハーフエルフの美少女と金髪ドリルの小柄な少女に、それぞれ水色とピンクの髪をした双子の姉妹。

この少年達もRe:ゼロから始める異世界生活の世界から、この世界に転移してきたナツキ・スバルとエミリアとベアトリスとレムとラム。

「なんだ、この状況は!?」

「また変なの増えたよ」

スバルは教室の大半が普通じやないと驚いて、AINZも心の中で同じ意見をした。

すると隣の席になつた茶髪の少年が声をかける。
「ところで聞いてなかつたけど、名前は？」

「AINZ・ウール・ゴウン。そう言うお前は？」

「俺はエレン・イエーガー。コイツはミカサ・アッカーマン」

この瞬間が、それぞれの異世界からこの世界に來た者達が出会つた瞬間だつた。

じこしようかい、進撃学園

県立進撃学園高校の1年4組。

席は31だけど、1人出席していないので30名の生徒が集まつた。しかしその大半が異世界から来た者達。

「注目！」

教室に入つて来たのはスキンヘッドの顎鬚で、鬼教官という言葉が合いそうな厳つい顔の中年。

「今日から運悪く貴様らの担任になつたキース・シャーデイスだ！初めに言つておくが、私は貴様らを歓迎しない！」

「なんか…鬼教官みたいな人だ」
「鬼教官そのものだな」

いきなりきつい言葉で話し続けるキース・シャーデイス。カズマもスバルも同じ感想だつた。

「今のは貴様らは、せいぜい巨人のエサでしかならない家畜以下の存在だ！そんなクソの役に立たん貴様らに心臓に拳を当てる自己紹介をして貰おう！」

「あの男、なんて無礼な言い方を：AINZ様、奴を先に始末した方が」「落ち着け、ここは奴の言う通りにしておこう。お前達もな」

正しく鬼軍曹らしい言葉使いにアルベドはおつかない事を言い出したので止めるAINZ。一応、シャルティア達にも言い聞かせた。

「貴様は何者だ。名を答えろ！」

最初にキースが目に着けたのはターニャ。そこで言われた通り心臓に拳を当てると自己紹介を始める。

「ターニャ・デグレチャフであります！」

「此処に来た理由を言つてみろ！」

「え：他に道がない。ただ、それだけです」

かつて帝国軍の士官学校に入つた時と同じ理由で宣言する。
「そうか、着席してろ」

「はい！」

言われた通りに着席すると別の生徒に目を付けて近づく。

「次、貴様だ！」

「アウラ・ベロ・フィオーレです！」

「どうか、バカみたいな名前だな？親が着けてくれたのか？」

「えっと…は…はい、そんな感じです！」

「アウラも座つとけ！」

などとアウラの頭を掴んで無理やり座らせた。それから次はスバル。

「貴様は何者だ」

「俺の名前はナツキ・スバル！」

「聞こえん！」

「ナツキ・スバル！天下無敵の無一文！」

教室に響くぐらい大声で自己紹介をしたスバルだつた。

「それでは、貴様は何者だ！」

「私はダグネスです！」

「違うぞ！貴様のような奴は豚小屋出身の家畜以下だ！」

「はい！私は：所詮家畜以下です！それで、他に汚い言葉は？」

罵られてかなり興奮してきたダグネスだけども、キースは気にせずに次に行つた。

「貴様は何者だ！」

「我が名はめぐみん！史上最強の爆裂魔法操る者！」

相変わらずの中二的自己紹介をするめぐみんで、呆れるカズマだがキースはまた別の質問をした。

「なるほどな…では、その眼帯は何だ?」

「この眼帯は我が力を封じ込めるマジックアイテム。これを外した時には「時にはなんだ?」

「え…だから…外した時は…」

「早く言つてみろ!」

「…あーーーん! ゴメンなさい! これ、カツコよく見せる為のただの眼帯です!」

キースの威圧に負けてしまいめぐみんは泣きながらファツシヨンだと告白。だが、それをお構いなしに今度はコキュートスに近づく。

「貴様は何者だ? 目標はあるか!」

「私ハコキユートス。AINZ様ノ為ニ体ヲ捧ゲル決意ガアル」

「ほう? それは結構な事だな。がんばるといい…だが」

「ン?」

「誰もお前の体や決意など欲しくない」

「ウツ!」

キースの容赦ない言葉に流石のコキュートスも冷や汗をかいてしまう。それでも容赦なく自己紹介を続ける。

「ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴァ・セレブリヤコーフであります!」

「自分はマテウス・ヨハン・ヴァイスであります！」

「ヴォーレン・グランツです！」

「ヴィリバルト・ケーニッヒです！」

「ライナー・ノイマンです！」

軍隊仕込みの紹介をするヴィーシャ達。今度はカズマとアクアになつた。

「どうも、佐藤和真です」

「私はアクア、水と勝利を司る女神！」

「と言い張る頭が悪くて残念な奴」

「ちよつとなによその言い方！」

カズマの容赦ない付け足し設定に大声で怒鳴るアクア。するとキースはこんな質問をして見た。

「では、お前はどんな学園生活をして見たいのだ？」

「え？まあ、とりあえず平凡でトラブルごとが起きないようなど、いつ！」

なんとキースは強めにカズマの額を頭突きしたので、座り込むぐらいに痛がつてしま

う。

「痛ててててて…」

「誰が座つていいと言つた！こんな事では、お前の望む平凡な学園生活など送れんぞ！」

「ひえ～～なんて容赦しない人だ…」

思わずAINズは改めてキースのやり方に少しごりごりつてしまふ。

「次、貴様だ！何者だ？」

「コニー・スプリンガー！南ナカコ中出身です！」

「逆だコニー・スプリンガー。貴様の心臓は右にあるのか？」

坊主頭の少年、コニー・スプリンガーは敬礼が逆という事でキースに頭をグリグリされながら怒られる。

それから今度はエレンの番になつた。

「では、貴様の番だ！名前と目標を言つてみろ！」

「はい！シガニンシナ中出身、エレン・イエーガーです！そして俺の目標は、学校中。いや、世界中の巨人を駆逐してやる為です!!」

などと大声で宣言するエレン。ミカサは呆れて周りは呆然となる。

「巨人つて…え？」

「アソッ、何を言つてるんでありんすか？」

「バルスと同じくらいの人みたいですね？」

「嫌々、ラム。そこまで言うのか！」

周りから変な目で見られてラムからの毒舌にスバルは言い返す。

「ミカサ…この反応はなんだ？」

「当たり前だよ…エレン」

ミカサも呆れながら言つたりすると、スバル達を教室に案内してくれたジャンが笑い出す。

「おいおい、巨人を倒すだと？」

「あ？」

「俺ははつきり言つて臆病な性格でね。そんな厄介な考えをするようなバカじやないぜ」

まるで嫌味な感じでエレンに向けて言いだす。

「貴様、名は？」

「あっ！じゃ、ジャン・キルシュタインです！俺もさつきのカズマいう奴と同様に平凡な学園生活を望みます！」

キースに言われたので慌てて自己紹介をするジャンは、そのままエレンに近づく。
「ところでさあ、お前つて小学校や中学で浮いてた感じか？」

「あ？だからなんだ」

「ちなみに俺はサッカー部で活躍してたし！勉強も出来て人望もあつて、年賀状なんか12枚だつたし！…寒中見舞いを含めてだけど」

「んだと！俺だつて結構充実した学校生活を過ごしてきたんだぜ！あくまでも楽しかった！」

自慢し始めるジャンに負けずに張り合うエレン。この光景に周りは変な目で見られているのに気づかず。

「うわ～～～2人共、思考そつくりみたいだな？」

「たしかにな」

呆れるカズマにアインズも同じ意見。

「止めなさい、エレン」

「なんだよミカサ！」

すぐにミカサがエレンを止めに入る。だけど、ジャンは止めに入ったミカサの容姿などを見て変な気分になつて、はつきり言つて惚れてしまつた様子。

「では、次は…ん？」

するとキースはもぐもぐとおにぎりを頬張るポニー・テールの少女をして、そのまま近づいてみる。

「おい…貴様」

「パクパク！もぐもぐ！」

「貴様だ！貴様に言つてる！何者なんだ、貴様は!?」

「んぐぐぐ…!?

大声で呼び止まれたので、驚き少し喉につつかえたがすぐに飲み込んだ。そして少女はおにぎりを持ったまま敬礼して自己紹介をする。

「北ナカコ中出身、サシヤ・ブラウスです」

「サシヤ・ブラウス：手に持つているものは何だ？」

「おにぎりです。中身は鮭です」

「では…なぜ今ここでおにぎりを食べている」

「それは、急いできたので朝食を食べそこなつたからです。今食べるべきだと質問をし続けるキースにサシヤは答え続けた。当然、周りの全員はこの状況で早弁の理由を正直に言う彼女に、ドン引きしたり変な奴だと思われたりされる。

するとサシヤはおにぎりを半分にしてキースに差し出す。

「あの…食べたいのなら、半分どうぞ」

「な……」

「……へえ」

これにはさらにキースは呆然として、サシヤは思わずやり遂げた感じに軽く笑う。

にゅうがくしき、進撃学園

「では、ホームルームを終了とする！入学式の放送まで教室で待機！」

クラスメイトの自己紹介が終わって教室を出るキース。ちなみにサシヤはその後、拳骨を喰らつてバケツを持つて廊下に立たされた。

「やれやれ、やつと終わったか：ホームルームは懐かしいからな」

AINZは両腕を伸ばして軽くストレッチをする。まさか学園生活するなんて思わなかつたが、なんだか懐かしい気分になつていた。それから少し周りを見て確認。

「ねえ、アソシラアンデッドよ！なんでほつとくの？」

「あのなあ、さつきの先生を見ただろ？なんか問題を起こしたらきつと容赦しないぞ？」
「とにかく存在Xめ…この私が屈せるとと思うな！」

「ちゅ…中佐？」

「こんなにたくさん的人がいるなんて、学校つて本当に楽しそう♪」

「こんな時にもエミリアたんのポジティティブは最高だね！」

異世界組はそれなりにこの状況を受け入れたり把握しようとしていた。とにかくAINZも情報収集しようかと、エレンに声をかける。

「あの…エレンだつけ?」

「なんだアインズ」

「さつき、巨人がどうとかつて言つてたが?」

自己紹介で巨人って言つてたので質問してみると、エレンは拳を握り締めて悔しそうに口を開いた。

「巨人は…俺から大切なものを奪い取つたんだ」

「大切なものを?」

「だから俺は、この世から巨人を一匹残らず」

「エレン、これ以上言つちやダメ」

しかしすぐにミカサが喋るのを止めようとした。

『ピンポン!パンポン! ただ今より、入学式を始めます。 入学した生徒は全員、お弁当を持つてグラウンドに来てください』

「え? なんで弁当を?」

「あ…私にも…」

「まあ、言われた通りにするしかないの」

するとスピーカーから放送が流れたが、なぜか弁当を持参との指示なので全員は疑問に思う。

1年の生徒全員はグラウンドで入学式が始まった。そして先生達もグラウンドに来て、キースがマイクの前に立つ。

「では、ただ今より。104回、県立進撃学園高校の入学式を行う！まずは校長先生と教頭先生の挨拶」

その瞬間、大きな雷と地響きと揺れが起きた。エレンとアインズ達は驚いて、中には尻餅をついた生徒も出る。

「ターニャ中佐！この揺れは？」

「地震ではないな？」

「おい、あれはなんだ！」

コニーが壁に何かいると気付いて指を刺した。そこで目にしたのは指のようなもので、エレンはそれが何か気付く。

「…奴だ！」

さらに壁から顔を出してきたのは筋肉繊維が剥き出した60メートルぐらいの巨人で、全身から蒸気を吹き出しながら50メートル近くの壁から校舎を覗き込んだ。

「なんだあれは!?」

「まさか、あれがエレンの言う巨人！」

「おいおい…じゃあなにか！」

「彼らの言う巨人つて本当の事か!?」

「そうだ。アイツが俺の大切なものを」

アインズ達が驚いている時に、いつの間にか別の方から15メートルで外骨格姿の巨人を筆頭に、大量の巨人達がグラウンドに入つて来た。

「巨人棟の巨人がやつて来たあああああ!?」

「逃げろおおおおお!!」

生徒達は慌てて巨人から逃げ出した。しかしダクネスがいつの間にか巨人に捕まってしまう。

「これはあれか！巨人どもが私の体を弄び、辱めを受けたりするのか！」

「お前、なにいち早く捕まつてるんだ!? しかもこんな時に変な妄想をするな！」

捕まつて妄想をし始めるダクネスに向けてツツコミをするカズマ。だが、彼女の耳には届いていない。

「まさか、ここでこのような目に合うとは仕方ない…さあ、巨人達！わたしを思う存ぶ…え？」

けれども、巨人は弁当を奪うとそのままダクネスを地面にたたきつけた。

「はぐつ！なぜ…弁当を？」

「うわああああああああああああああ!?」

今度は別の所から叫び声がした。

それは3組のトーマス・ワグナーが巨人に衡えられた。一度は飲み込まれたが、すぐに吐き出される。

「トーマス、大丈夫?」

「あーーーー!俺の餃子弁当が!」

巨人は器用に口で弁当を奪つた。さらに他の生徒達も「私のだし巻きが!」

「母ちゃんのから揚げ弁当!」

巨人達は、次々と生徒達の弁当を強奪し続ける。

「まさか、巨人達は」

「弁当だけを狙つているのか?」

カズマとターニャはまさかの巨人達の行動に半分呆れたりした。

だが、いつのまにか2体の巨人がアクアとめぐみんに迫る。

「この巨人め!水の女神アクアがいる限り、こんな横ほつ!?

「ならば私の爆裂魔法で、巨人達を全て吹き飛ばつ!?

しかし容赦なく巨人がアクアとめぐみんを踏みつぶして弁当を奪い。コキュートスやヴァイス達は戦おうとしたが、巨人はかなりのチームプレイを見せて弁当を奪われて

しまう。

「アインズ様！流石にヤバいですよ！」

「彼らの言う通りですスバルくん。私達では、あの巨人を倒すのは」

アウラもレムも弁当を奪われて巨人達の危険性を教え、エレンはこの状況を見続ける。

「エレン！早く逃げよう」

「そうだ…お前達は早く言つた方が」

ミカサがすぐに逃げようとエレンを引っ張り、アインズも2人を逃がそうとする。しかしエレンは動こうとはせずに

「またしても、あの時と同じ…こんな事で屈して溜まるか！」

そのままグラウンドに放置していた金属バットと竹ホウキを持つて、腕を伸ばす超大型巨人の腕に乗つて走る。

「目標は目の前、超大型巨人！」

「エレン!？」

「アイツ、まさか本氣で?!」

流石のアインズも超大型巨人と戦おうとするエレンに度キモを抜く。そして走つて顔に近づこうとした。

「もう少しつて、あが!?」

「「「あ…」」」

だが、軽く手で弾かれて地面に叩き付けられてしまう。それでもエレンは立ち上がるうとしたが、超大型巨人はそのまま弁当を奪つた。

「あつ、止めろ…止めろおオオオ!!」

必死で止めようとしたが弁当箱ごと食べて蒸氣を上げて消えてしまった。

「お前は…お前は…一度も俺のチーズハンバーグ弁当を奪いやがつてええええええ!!」

エレンは涙を流して大声で叫んだ。しかし周りの視線はかなり冷たい。

「チーズハンバーグつて…え？」

「まさか、巨人を憎んでいたのって」

「それだけかよ?」

「はあ…だから、そんなことを大声で言わないでよ」

巨人に敵対心を強める理由が、前にも弁当を奪われたという下らない事だつたので呆れてしまい。ミカサも恥ずかしそうになる。

その頃、校舎でその様子を見ていた3人の生徒がいた。

「チーハン野郎」

など1人がエレンに向けてバカにするように吐く。それから巨人達も殆どの生徒か

ら弁当を奪い終るとグラウンドから立ち去った。

とにかく入学式が終わって生徒達は全て下校した。AINZ達はいつの間にかポケットにあつた、住居となる場所が書かれた地図を持つて向かう。

「しかし、この世界は巨人が存在するなんてな：エレンも巨人を憎んで理由があると
は：食べ物の恨みは恐ろしいって奴だな」

一見普通の現代に見えるが、じつは巨人がいると改めて異なる世界だと確信したAINZ。だが、しばらく歩くと何者かが現れた。

「うふふふふ、待つてたわよ」

「お前は!？」

それはアクアだつた。突然の登場にアルベド達は一気に警戒して戦闘態勢を取る。

「他の人たちには気づいてないみたいだけど、わたしはそうはいかないわ。この女神アクアが、アンタのようなアンデッドを葬つてあげるわ！」

「女神だと？」

アクアは聖なる力を発動し始めるので、AINZは彼女が自己紹介で言つた事が本当だと確信した。

だが、次の瞬間。

「コラっ！」

「ぎやつ!?」

「え?」

いきなり現れたカズマはアクアをぶん殴った。

「ちよつと、女神の私にグーで殴つた!」

「お前こそ何やつてんだよ!色々と問題を起こしたら、あの先生にどんな目に合うのか
!?」

「だつて、アイツらアンデッドよ!おまけに悪魔やモンスターがこんなにも!」

揉め事を起こすのは危険だと怒鳴りつけるカズマだが、アクアはAIN兹達の方が
もつと危険だと言い張る。

「とにかく女神としてほつとけない!ターンアンデッ、ぐは!」

カズマの言葉も聞かずにターンアンデッドを発動しようとしたけれども、偶然歩いて
きた力バンを持った巨人に踏まれて不発に終わつた。すると巨人はカズマとAIN兹
達に顔を向けて、軽くゴメンと素振りを見せて何事もなかつたかのように去る。
「貴様：なんかまた巨人に踏まれたな?」

「てか、あの巨人!入学式の時にも私を踏みつぶしてお弁当を奪取つた奴よ!
「たしかにな。じゃあ、もう帰るか」

そのままカズマはアクアを引っ張つて無理やり帰つた。

「ちょっと放しなさいよ！あのアンデッドをほつとくつもり！それにさつきの巨人も、全然反省する気なかつたわよ！絶対にアンタ達を成仏させてやるし、あの巨人も女神の恐ろしさを分からせてやるんだから！だから早く放してよ！」

泣きながら嫌がるアクアを無視しながら引きずつて帰るカズマ。

それから次の日。1年4組の教室。

「先生、アクアさんは？」

ジャンと隣の少年、マルコ・ボットはアクアがいない事に気づいて質問。

「アクアは昨日の放課後、問題を起こしたので廊下に立つてもらつた！」

キースの言う通り、アクアは昨日のサシヤと同じように拳骨を喰らつてバケツを持つて立たされた。

「悪いのはアイツらなのに…私は女神なのに…」

「静かに立つてろ！」

「ひいっ！はい！」

泣きながら文句を言うアクアにキースが怒鳴つて黙らせた。

ぶかつ、進撃学園

ターニャ達が住むマンション。そこで彼らはこの世界について分かつたことを話し合つた。

「まずこの世界は…人間と巨人が暮らしていて、巨人達は常に人間を見下し、人間もまた巨人に弁当などの食料を奪われまいと怯えながら暮らしています」

「進撃学園高校は見ての通り50メートルの壁に囲まれており、そこで人間棟と巨人棟に別れています」

「なんでも、超大型巨人が校長で鎧の巨人は教頭らしく。この2体が、巨人に高い地位を持たせているらしいのです」

「元々は人間と巨人の交流と共存の為に出来たらしいのだが、未だにその溝は深まつてている様子です」

ヴィーサイ達は昨日と今日まとめたこの世界と学園の事情を説明しあつた。これらの情報を知ったターニャはいつも通りあれに関係してると決める。

「やはりこれも存在Xか…しかし今はなぜヴィーサイ達も一緒に」

自分でなくヴィーサイ達までも巻き込まれたと考え出す。だが、もつとも重要と

なるべきことが一つ。

「しかもなんか変な連中までいるみたいだし…なんかこの世界の住人は気づいていないようだが」

変な連中は当然、AINZとスバルとカズマだった。けれども、今はそれを後にしようと思ふ。

「とりあえず、また明日考へるとしよう」

「そうですね少佐。今日はもう寝ましょうね」

「よろしい。では各自消灯」

ターニャ達はそのまま明日にすることになった。

それから次の日、1年4組は今日もキースによる授業が行い。しばらく進んで午前中の授業が無事に終了。

「では、午前の授業はここまでだが…部活は入つてゐるだらうな？」

「部活？」

なんとキースからクラス全員に部活はしているのか尋ねてみた。

「あの…なぜ、いきなり部活の話を？」

「とにかく、明後日までに入部しておくるのだぞ。もしも過ぎたら…分かつてゐるだらうな？」

「ええ…」

念入りに全員に向けて威圧をかけるキース。

なんでも進撃学園は部活が盛んな高校で、人間も巨人も必ず部活に入らなければならなかつた。そのせいか、期限までに入部届を提出しないと担任が適当な部に強制入部させられる。そして教室に出ようとしたが、エレンに目を向けた。

「エレン・イエーガー」

「はい?」

「たしか、アルミン・レルトと同じ中学だつたな」

今度はアルミンという学園に来ていな生徒の話をし始めた。

「アルミン：あの空いてる席のか?」

「たしか、エレンから聞いたけど、中学2年の時に俺と同じように引きこもつたらしいな」

スバルとカズマはおなじ引きこもり同士なのが、そのアルミンに少し共感を感じた。

「明日までにアルミンを登校させて入部届も持つてこい」

「はい! 分かりました」

そしてキースは教室から出て、昼休みが始まつた。

「まさかこの学校つて、そんなしきたりというか…暗黙のルールみたいのが」

「たしかに色々と忙しかつたつたからね」

カズマとエミリアとレムとラムは屋上で弁当を食べながら、学園と部活に隠された秘密について話をしていた。

「まあ、私もレムも既に吹奏楽部つて部活に入つているから関係ないけどね」「本当ならスバルくん達も入部させたかつたけど、すでに定員オーバーになつちやつたからね」

「そういえば、ベアトリスも部活に入つたみたいだしね」

猫型精霊のパックもパンをモリモリ食べながらベアトリスの話をした。その頃、ベアトリス本人は廊下を歩いている。

「全く、なんで部活を決めてない奴がいるからつて、ベティーにまで怒鳴る必要があるのよ！」

どうやらキースの言動に腹が立つたのかブツブツと文句を吐いたりする。丁度、ケーニッヒとノイマンの隣を通り過ぎるが、2人は彼女の様子を見たりした。

「なにこつちを見ているのかしら？」

「いやいや、これは失礼しましたよ」

「申し訳ありませんね。お嬢さん」

「ん：そのお嬢さん呼ばわりは止めてくれるかしら……どいつも……いつも…」

などとケーニッヒとノイマンは少し冗談な感じでベタリスに謝罪するが、彼女は余計に苛立ちを見せる。

「そんな彼女を見たヴァイスがすぐに2人に声をかけた。

「ケーニッヒ中尉、ノイマン中尉：彼女に何かしたのか？」

「いえ、別に何も…してないであります」

「大尉殿。幼女はどこの世界でも難しいもんでありますな」

ノイマンがまた冗談を言つた瞬間、3人はそのまま軽く笑い出す。

「そういえば、大隊長殿とヴィーゼヤ伍長はもしかしてまだ？」

「ええ、部活を決めてない様子ですね」

「我々はもちろん、グランツも入つてているというのにな？」

「仕方ないさ。大隊長殿は忙しくて余裕がなかつたからな」

3人はちゃんとターニャとヴィーゼヤが部活に入るのか心配になつて來た。

一方、この2人は

「あ～～あ、まさか入部しなかつたら無理やり適当に入れられるなんて聞いてないぜ」

「おまけに残つた部は変なのばっかりだし、なにより運動系の半分が巨人と合同なんて

…

カズマもアクアも部活探しをしているが、あんまりいいのが無くて文句を言つたりし

ていた。

「それにしてもダフネスは剣道部なのは分かるけど、まさかめぐみんがコスプレ研究部に入るなんてな…」

「物凄く勧誘されたみたいだし、本人も結構乗り気だつたからね」

コスプレ研究部の部員は中二全開なめぐみんのキャラクター性と、いつも行つている決めポーズがモデルとしてピッタリらしく勧誘してきた。そしてめぐみん本人は、部で制作しているコスプレ衣装を気に入つたらしくて迷わず入部した。

「いつその事、アクシズ教部を作つて部員と言う名の信者集めを…」

「止めろよ！仮に作つたとしても、絶対受理さないし。設立直後に廃部するかもよ！」
さらにとんでもない事を言い出すアクアに、すぐに止めようとするカズマだった。

それからアインズとアルベドは

「部活か…考えてなかつたな？」

「所詮、それぞれ有象無象に集まつたもの。入る必要はありませんよ」

「そうは言つてもな…結局、キースによつて無理やり入れられるのだぞ」

「こちらも部活の事で色々と苦労している。だが、そこにデミウルゴスが来た。

「アインズ様、部活は見つけましたか？」

「まだだ…そいいえば、デミウルゴスはたしか？」

「はい、私は情報収集のために新聞部に入部しました。では、アルベド。アインズ様の部活探しをサポートしなさいよ」

「当然、言われなくても」

デミウルゴスはこの場から去った。すでにデミウルゴスも新聞部に入つて、シャルティアもアウラもマーレもコキュートスも、部活に入つているのに自分とアルベドはまだという現実。

「は〜〜俺つて本当にコミニケーションが少ないのかな」

心中でため息を吐いてしまうアインズたつた。そんなやり取りを、ヴィーシャと一緒に弁当を食べていたターニャが目撃。

「もしや…アイツは」

そして放課後。

全員が帰りの仕度をしていると、ターニャはアインズの前に来る。

「ん?なんだ」

「ちょっと、公園に来てくれないか? 2人つきりで」

「なに?」

「貴様! アインズ様と2人つきりですって!」

「落ち着けアルベド!」

怒り狂うアルベドをすぐさま落ち着かせようとするAINZ。

「そうですよ…アナタが彼の事を好きだつて気持ちは誰にも負けていませんよ」

「アナタ…」

レムも優しく声をかけると、そのセリフがグツと来たのかアルベドは冷静を取り戻す。それは無視してAINZとターニャは

「しかし…今は部活が」

「とにかく頼む！今すぐだ」

「…分かった」

仕方なくAINZはアルベドを置いてターニャと一緒に教室を出た。

ひきこもり、進撃学園

公園に来たアインズとターニャ。一方的に睨み続けるターニャに対し、当然アインズは戸惑っていた。

「一体何なんだ？この状況は……ずっと睨んでいるし。いや、ここで怖じ氣づくのはダメだ。ここはやはり」

「貴様、私に用があるらしいが……それは私を呼ぶにふさわしい要件だろうな！！」いつもの支配者の態度で尋ねた。ターニャは臆することなく、口を開いてアインズに質問し始めた。

「貴様に尋ねるが……存在Xなのか?!」

「……なに？えつくす？」

「……あれ？」

しばらく固まる2人で、それからしばらく話をした結果。

「なるほどな……お前は別世界に転生した身なのか？」

「そういうお前は、ゲームキャラとして転移したって訳か？」
お互いそれぞれ別の異世界から来た者同士として、さらに元の世界ではサラリーマン

同士だつたとして仲良く話することが出来た。

「アナタは会社ではどんな立場で？」

「私は所謂一流の所で人事課を任せられている身だがな。そういうお前は？」
「いや…恥ずかしい話だが、勤めていたのがブラック企業で」

などとお互いの会社の話をしたり、または転移・転生した先の世界でどんなことをしていたりと、かなり話の花を咲かせていた。

「アインズにターニャ？」

丁度そこに、エレンとミカサがコンビニ袋を持つた姿で2人に声をかけてきた。

「そのアルミンというのは、なぜ引きこもつたのだ？」

「それが理由は分からねえんだ：ただ中学の球技大会とかで」

「球技大会？」

アインズとターニャはとりあえず2人と一緒にアルミンの家に向かつた。ちなみに

コンビニ袋の中身は、アルミンの好きな肉まんと甘酒らしい。

「それでエレンとミカサはどんな部に入るんだ？」

「うーーーん、巨人を倒しまくる部活があるなら入るけど」

「全く…エレンらしい」

どの部活に入るかの話をしている内に、アルミンの住む家に近づいてきた。

「さてと、どうやつてアルミンを説得するかな…」

などと考えている時、大きな足音と一緒に4人を覆う影が出た。すぐに振り向いた瞬間、巨人が素早く肉まんと甘酒の袋を奪い取った。

「この…肉まんを返せ！」

すぐさまエレンが取り返そうとするが、あつけなく巨人に捕まれてしまう。必死にジタバタと両腕をもがいたりするけども、完全に無意味。

「マズイな…この世界で、私の魔法は通用するか。仮に出たとしても、大騒ぎになるかもしない」

「だが、考えている暇はない。やるしかないか！」

この世界で魔法が使えて、しかも巨人に効果あるのか考えるアインズだが、今はエレンを助けるしかないとターニャはさつそく魔法を発動した。だが、そこに何者かが走つて来てジャンプした瞬間、巨人は後頭部にコブが出来て倒れる。エレンは地面に叩きつけるが、何事もないよう起き上がりつて肉まんの袋をキャッチ。すぐにミカサが駆け寄る。

「エレン、大丈夫？」

「ああ、ミカサ。それよりも」

エレンが目を向けた先に立っていたのは、木刀とハリセンを持った黒髪で目つきの悪

そうな青年で、進撃学園の制服を着ていた。

「あの男：かなり強者のオーラが漂うな。巨人を倒したことから、ただものではない」

「まさに兵士の芯材と言つたところか？」

アインズとターニャは青年が戦士だと感じた。

するとエレンは立ち上がり決意した。

「決めたぞ。ミカサ」

「え？」

「俺はあの人居る部活に入る。そして巨人と戦える力を手に入れる」

エレンは彼の戦闘力を見得られて、その部に入れば強くなれると思つた。そんなエレンの決意にアインズとターニャは

「なるほど、たしかにあの男の部に入れば元の世界に帰れる術が知るかもしない」

「少し危険ではあるが入つてみる価値はあるな」

などと部に入つて利用して帰れるかどうか調べようと考える。

「おい、ガキ共」

「「「え?」」」

「これはどういう状況だ?」

青年はエレン達を睨みつけながら質問してきた。けれども、逆にエレンが質問をす

る。

「あの！アンタは進撃学園の先輩ですよね？その、先輩は何部なのですか？」
「お前が知る必要はない」

などと発言して去つていった。

「必要ない…」

「まあ、明日にでも学校で聞いたりするしかないな」

少しショックを受けるエレンだが、AINZが明日調べようと言う。それからアルミンの家に着く。

「しかし、大丈夫かの？わしも説得しようとそのしたが、全然ダメだつたからな」「大丈夫ですよ。私達は親友ですから」

「そうだな。孫を頼んだよ」

アルミンの祖父が心配するが、とりあえずエレン達に託してこの場から離れた。そしてアルミンの部屋の前に立つ4人。

「アルミン。いい加減学校行こうぜ。先生がカンカンだから怒つていたぞ」

「それに、明日までに部活に入らなきや変な部に入れられる。そんなのイヤでしょ？」
エレンもミカサも扉越しに説得してみる。

「ダメだよ…どうせ僕はみんなの足を引っ張るだけなんだ…」

だが、御覧の通りに出ようとせずにネガティブな返答の仕方。しかしあまりにもグダグダに引き延ばすアルミンに、ストレスが溜まつたターニャがドアをドンドンと叩く出す。

「いい加減にしろ！」

「ういっ!?」

「貴様に何が起きたか知らないが、こつちはお前の為に来てているんだ！これ以上、変な言い訳をするならば容赦しないと思え！」

軍事教官してた頃と同じ威圧を放ちながら大声で叫び続ける。これにはエレンもミカサもAIN兹も驚き、祖父もつい階段から顔を少し出す程に。
それからしばらくするとドアノブが回り。

「たしかに…言う通りかもしれないね」

扉を開けて顔を出したのは、金髪で童顔の少年。彼がアルミン・アルレルトだった。

「ほら、お前のような好きな肉まんと甘酒もあるぞ」「ありがとうございます…」

4人を部屋に招き入れてアルミンは改めてAIN兹とターニャに自己紹介をする。

「えっと…僕がアルミン・アルレルトです。君達は？」

「私はAIN兹・ウール・ゴウン」

「ターニャ・デグレチャフだ。さつきは、怒鳴つてすまないな」

「いや、僕の方こそゴメン」

「ターニャが頭を下げて謝罪するのでアルミンも謝罪した。
「なあ、アルミン。本当に明日学校に行こうぜ」

「でも…やつぱり僕はダメだよ。僕のような運動音痴は、きっと迷惑をかけるから」

「運動音痴だから？」

「うん…あれは僕が中学2年生の時」

中学時代。競技大会でバスケの試合をした頃。

当時、中学2年のアルミンは極度の運動音痴なので、ボールが取りずに味方のチームと相手チームにぶつかって、終いには自分の顔面にボールをぶつけてしまう。おかげでアルミンのチームは一回戦で敗退。そして全て自分の責任だと感じで、不登校することが多くなり。ついに3年の時に引きこもった。

「たから、もし运动会や球技大会だとみんなに迷惑をかけるし。何より、こんなヘタレな僕だから受け入れる事なんてないよ」

「ちよつとちよつと…なんでかたくなに自分をこんな否定するのかな」

なんともはつきりと自分はダメだと宣言するアルミンに、AINZも流石にスゴイと感じてしまう。だが、ここでミカサはアルミンの頭をチョップする。

「痛っ！」

「アルミン、よく聞いて。うちのクラスにはとにかく変人が多い」

「変人」

そのままミカサは語り始める。

「まず、人目を気にしないカッフル」

それは同じ4組のフランツ・ケフカとハンナ・ディアマントで、どんな時でもイチャイチャしている。

「中二病が4人と食べ物のことしか考えていない子」

シャルティアとめぐみんとアクアとベアトリスとサシヤ。

「後、バカとドM」

コニーとダクネス。などとクラスメイトを容赦なく悪い印象を暴露するミカサ。

「それでも関係なく仲良くクラスメイトとして認め合っている。運動音痴なんて気にしなくともいいから、自身を持つて学校に来て」

「そうだ。失敗しても気にするな！俺達が付いているからな！」

エレンもアルミンを励ますようにする。これには自分達は必要ないと感じたのか、アインズとターニャは家を出ることにした。

次の日。

「アインズがアルベド達と登校していると

「アインズ！」

「振り向くとエレンとミカサの後ろで、なぜか掛布団を纏つたアルミンがいた。「アルミン、登校するのか」

「うん、2人に励ましたおかげで自信が持てたんだ」「そうか。じゃあなぜ布団を？」

「僕、かなり冷え性だから」

などと笑いながら冷え性だと暴露。

「アインズ様、彼は？」

「初めまして！アルミン・アルレルトです」

そのままアルベド達に挨拶をした。

せんぱい、進撃学園

引きこもりのアルミンが登校できたが、それでも良い部が見つからないアインズとアルベド。

「やつぱり、すでに定員オーバーか」

「ようアインズ」

そこにターニャとヴィーザと、さらにエレンとミカサとアルミンがやつて來た。

「君達：もしかしてまだ？」

「全然ダメだ」

「どこもほとんどの部は、定員がいっぱいだ」

少し落ち込みムードになつて話すターニャ。するとアインズは落ち込みながらベンチに座る、カズマとスバルとアクアとエミリアとジャンとコニーとサシヤを見つけた。

「なんだあれは？」

「さあ……？」

「とてつもなくやつてるね？」

もの凄いどんより空気が漂つていたので、とりあえずアインズは声をかけてみる。

「あの、もしもし」

「なによアンデッド。哀れな女神をあざ笑いに来たの？」

「おいおい、心配してくれた相手にそれはないだろ？」

睨み付けるアクアにつかさずカズマが止める。

「とにかく、なにがあつたのか？」

「まあな…じつは」

スバルはこの暗さの理由を話した。

部活探しをしていたカズマとスバルとアクアとエミリアとジャンとコニーは、最初に野球部に来てみたが巨人と合同で、おまけに巨人用のバットやボールがあるので身の危険を感じ逃げた。次にサッカー部に来てみたが、そこも巨人と合同でサッカーボールも巨人用なので、大玉転がしになりかけたから慌てて逃げ出す。

ちなみにサシヤは料理部に入つたが、食材をつまみ食いしたのでクビになつたらしい。

「だからこんなに落ち込んでいるのか？」

「本当に大変だつたんですよ」

「いや…アナタのは完全に自業自得…」

泣き出すサシヤだが、自分自身のせいだとヴィーシャはツッコミを言う。

「この様子じやあ、未だに部活を決められてないな？」

「ん？」

いつのまにか金髪のガツチリ体格の青年と長身で特徴がない顔立ちの青年と、金髪のお嬢様な雰囲気の美少女と鋭い目つきの長身でそばかすの女性がいた。

「俺は3組のライラー・ブラウン。こつちは俺の親友のベルトルト・フーバー」「よろしく」

「私はクリスター・レンズ。よろしくね」

「ユミルだ」

ライナー達4人は全員に自己紹介をした。

「これはご丁寧に」

「いやいや、同じ1年だからな」

AINZはとりあえず今後のためとライナーと握手をする。さらにデミウルゴスがやって来た。

「AINZ様、部活の方は？」

「まだよ。本当に良い部はないのかしら」

「それなら良い情報がありますよ」

苛立ちを見せるアルベドだが、デミウルゴスは良い情報があると口を開き始めた。

「私が新聞部に入ったおかげで得た情報ですが、進撃調査団と言う部活と言うより組織があるのです」

「「「「進撃調査団?」」」

デミウルゴスが口にした進撃調査団と言う単語に全員は口をそろえる。

「はい、私の調べによれば…この学校には自由の翼の下、巨人に反抗して対抗する闇の組織があると」

「巨人をぶっ殺しまくれる部活って事か！」

「え？まあ…そう言う事になりますね…」

「エレン…嬉しそう」

目を輝かせるエレンにさすがのデミウルゴスも引いて、ミカサもかなり呆れてしまふ。

「俺も聞いたことがある。メンバーは巨人と戦える力があり、部長は人類最強の異名を持つとか」

「人類最強…」

ライナーも知っている情報を言つた途端、エレンとミカサとアインズとターニャは思い出した。昨日、巨人を倒した青年。彼がその人類最強と異名を持つ男だと。

「闇の組織って、なんかカッコいいな！」

「もしそこに入れば、巨人にお弁当を盗られなくても済みますかね？」

「巨人を倒したら、女子にモテるかもしれないな…」

などとジヤン達3人は調査団に興味を持ち始める。当然、彼らも

「AINZ様、その調査団に入りましょう。そして部を通して巨人にAINZ様の偉大さを見せつけて屈服させましょう」

「ふむ…そうだな。良し、入つてみるか！」

AINZとアルベドは巨人達に自分達の強さと存在をアピールするために。

「少佐。私達は？」

「もちろん入部だ。この世界と巨人を調べるためにな」

「そうですね：私もサポートします！」

ターニャとヴィーシャも巨人についてさらに調べるために。

「カズマ！ 私達も調査団に入るわよ！」

「え～～～！ お前何言つて?!」

「だつて！ 巨人達が女神の私をバカにして、お弁当を奪うのよ！ だつたら入部するしか

ないじやない！」

「そんな…なんだか胡散臭そудし…危なそудし…」

アクアは個人的な理由で巨人を倒そうとするが、平穏な学園生活を考えてるカズマは

乗り気ではない。

「スバル、私達はどうしよう？」

「そうだな……ここは空気を読んで一緒に入部しようか」

スバルとエミリアはこの場の空気から、仕方なく入部を決意。

「それで、その部はどこに？」

「噂では旧校舎にあると聞きますが、そう簡単には」

「でもとりあえず、行つてみようぜ。旧校舎に」

さつそく旧校舎に来てみた。そこで【進撃調査団】と分かりやすく書かれた張り紙のある教室を発見。

「あつたわね」

「それも分かりやすく」

「秘密基地みたいだな」

「ちよつと不安」

アクアとベルトルトとユミルとエミリアが呆れるぐらいに感想を言う。すると引き戸が少し開いて、少し老け顔で茶髪のパーマの青年が顔を出す。

「なんだお前達は？まさかここが巨人に対抗している闇の秘密組織、進撃調査団だと知つて来たのか？」

「自分で言つてるよ」

自分がからこが調査団の部室だと宣言した。

「この進撃調査団の活動は、学校には知られていない。しかもペーぺーの1年坊主になど」

「また自分で言つてるぞ…」

「本当に胡散臭い」

全員は疑つたり大丈夫なのかと心配し始める。

「とにかく、入れてください!!」

「うわっ！お前：秘密の組織が、やすやすと1年を入れる訳ないだろ！」

エレンは中に入ろうと引き戸を開けようとすると、青年は慌てて閉じようとする。お互い譲り合わないようになると必死になるが、うつかりエレンが手を滑らせて離した。「んごつ！」

そのまま青年は引き戸に挟まつた上に、舌も噛んで倒れた。

「オレオ！」

「どうした！刺客か？」

「まさか、こここの場所がバレたのか？」

薄い茶髪の女性と金髪で後ろ結んだ青年と短髪オールバックな青年が、倒れた青年改

めオレオに慌てて駆け寄る。

「いや…ただ、引き戸に挟まつて舌を噛んだだけなんですけど
カズマがつかさず原因を3人に説明。

「なんだ。てか、よく考えたらいつものことか」

「たしかにオレオは、一日に3回は舌を噛むよな」

「いつそ舌を噛んで死ねばいいのに」

「ペトラ！なに、恐ろしい事を本人の前で言つてるんだ！」

真相を知つた途端に3人は掌を返すような態度をとつたので、復活したオレオは怒鳴りつけた。

「もとはと言えば、コイツらが！」

「あれ？アナタ達つて、調査団に入りたいの？」

茶髪の女性ペドラーはオレオと違つて、友好的にエレン達を受け入れようと声をかける。

「ええ、そうですけど」

「うなんだ。私は2年のペドラー・ラル。それから同じ2年の、エルド・ジンとグルタ・シユルツ。ついでにさつきの彼は、オレオ・ボザド」

そのままペドラが調査団の今いるメンバーの紹介をする

「まあ、この俺も最初は抵抗はしたが：こうして見ると、お前らに何か強い兆しを感じる。運命つて奴だな？」

「などと、オレオは窓際でカツコつけ始める。これには全員が引いたりした。

「なあ、もしかしてこの人は？」

「少し中二病が残っているのよ。ゴメンね」

「いえいえ、同じのがいますから」

謝罪するペドラーだが、常にめぐみんという重度の中二病が居るので若干慣れている力ズマだつた。

「あの？調査団のメンバーはアナタ達だけ？」

「まだ2年生が1人と3年生が3人いるんだけど」

エミリアがこの部室にいる全員がメンバーだと質問してペドラーが答えた瞬間。

「ヤツホーーー・集まつているかい？」

部室にメガネにポニーテールでジャージを着た女性と、大柄で無情髪に寡黙な金髪の青年と、髪を真ん中分けした個性がない顔立ちの青年が入つて來た。

「ハンジ副団長！」

「ミケさんに、モブリット！」

「彼らが？」

「そう、3年で副団長のハンジ・ゾエさんとミケ・ザカリアスさん。そして2年のモブ
リット・バーナー」

ペドラが3人の紹介をした。するとハンジはAINZ達に気づくと
「あれ？もしかして調査団に入りたい子達？」

「はい、そうですけど」

「だつたらいいものを見せてあげるよ」

「いいもの？」

ハンジは持っていた風呂敷を開ける。

「見て見て！巨人の切った爪、お土産と研究用に持つて来ちゃつた♪」

などと巨人の爪を入れた大型の瓶をAINZ達に見せびらかした。この行動に、当然
引いたりする。さらにミケもジャンとカズマとスバルに近づくと匂いを嗅ぎ始める。

「……ふつ」

「「え！」」

軽く鼻で笑われた。だが、ハンジは語り続ける。

「やっぱり、君達もこういうのに興味があるんだよね？」

「いえ：俺はただ巨人を倒したいだけで」

「分かる、分かるよ。巨人の憎しみを通り越して愛情を見つけたいという気持ち。全身

をかつさばいて、骨の髓まで調べたいという情熱…」

「先輩！ マニアックすぎます」

「なんだ…ここは？」
暴走し始めるハンジにモブリットがなんとか落ち着かせようとツッコミを入れる。

ターニャは改めて調査団に疑い始めた。巨人に歪んだ愛情と研究心を持つた奴と、ベルトルトとデミウルゴスにも匂いを嗅ぐ奴と、中二病といった集団。

だが、エレンは本題にはしようと声をかける。

「あの、ちょっと良いですか？」

「なんだい？」

「じつは昨日、俺を巨人から助けた人がいるんですけど…もしかしてここなの？」

「巨人から君を？ もしかしてリヴァイが言つてたのって、君かい？」

「リヴァイ・さん？」

昨日助けて貰った男はリヴァイという名前らしい。

「それで…リヴァイ団長はどこに？」

「ああ、だつたらすぐに呼ぼうか」

するとハンジはペットボトルのジュースを取り出して飲み干した。そして空のボトルをスバルに渡す。

「え？あの…これって？」

「いいから、これをゴミ箱に投げ捨てて」

「はあ、投げ捨てるつて！」

訳の分からないままでスバルは言われた通りに、ボトルをゴミ箱に投げ捨てた。その瞬間、引き戸が勢いよく開くと同時に、何者かがスバルに向かつてドロップキックが炸裂。

「ぐへっ！」

「スバル！？」

「コラ、ガキ。ペットボトルはラベルとキャップに分けて、別々に捨てろ」

スバルはぶつ飛ばされてゴミ箱に頭が入ってしまい、すぐさまエミリアが駆け寄る。そしてドリップキックした男がゴミの分別を注意。

「あの人！やつぱり…アンタが人類最強の！」

「という訳で彼が調査団の団長、リヴィアイ。見ての通り神経質なんだよね」

エレンは確信した。昨日出会った青年が調査団の団長リヴィアイで、ハンジが彼の説明をした。するとリヴィアイはアルミニンの布団を見ると

「おい、ガキ。その布団を貸せ！」

「えっ！ちよつとなに!?」

いきなりアルミニンから布団を奪い取ると、ポケットから裁縫道具を取り出す。

「全く、こんなボロボロな布団でよく学校に来られたな」

などと文句を吐きながらも布団を縫い直してアルミンに返した。

「あ…ありがとうございます！」

直してもらつてお礼を言うアルミンだが、AINZはただ1つ思つた事がある。

「まさか…団長も相当な変人だな」

メンバーもそうだがリヴィアイも相当な変人だと改めて知る。

それからしばらくして、リヴィアイ達はエレン達が此処に来た理由尋ねてみる。

「では改めて聞くが、調査団に入団したいんだな？」

「はい！よろしくお願ひします」

「私も彼と同じ意見だ」

「調査団に入るという事は、どういう事が分かつているんだな？」

リヴィアイが言うには調査団は巨人に反抗するだけじゃなく、学校の秘密も探るのが目的。なんでも進撃学園はウォール・マリアという外壁に包まれた学校だが、内側にもあるウォール・ローゼと呼ばれる壁もあって、そこは生徒達が興味を持つことは禁止とされている。調査団はそんなウォール・ローゼの内側を調べて学校の隠された秘密を暴くのも使命にしていた。

「もしも学校側にバレたら、退学が免れんぞ？」

退学の可能性があつても入りたいかどうかリヴァイが全員に聞いてみた。

「覚悟ならとつくり出来るぜ！」

「そうよ！ 巨人にバカにされるなんて、絶対に許さないから！」

「食べ物の恨みは怖いんですよ！」

「母ちゃんのから揚げ！」

「ここまで来たからには、後戻りはできません！」

「巨人どもにAINズ様の勇姿を見せてやりたいですから」

ジャン達は色々な目標を込めて入ることを希望。しかしリヴァイはエレンに目を向ける。

「チーハン野郎。お前はどうする？ さつさと答えろクズ野郎」

改めて調査団に入つてどうするのか聞いてみた。エレンはかなり息を荒く吐きながらも口を開き。

「俺は：調査団に入つて、とにかく巨人をぶっ殺したいです」

変わらずエレンは巨人を倒したいと宣言。するとリヴァイは木刀を持つと、AINズとターニャ達はすぐに構えた瞬間。

「悪くない」

するとリヴァイは目に見えないほどのスピードで、エレン達全員に入団の認定書を

張つた。

「これつて…」

「進撃調査団の、入団を全員に許可する」

「これで、俺達は調査団の団員だ!!」

入団出来て喜ぶエレン達。

「やりましたね。アインズ様」

「そうだな：しかし、この学園の秘密か」

「まあ、これで一步近づけたという事だな」

「がんばりましょうね。少佐」

「よーーーし。女神が巨人共を成敗してやるから！」

「なんだか、また引きこもりたくなってきたな…」

「調査団か：仕方ないから、やるしかないな」

「きっと私達ならやれるね♪」

アインズ達はそれぞれ目標を立てたり、また心配したり少し後悔したりしていた。

「あの…私達」

「すでに部活を入れてるけどな？」

「そうだよね…」

「仕方ないな」

「たしかに、掛け持ちはOKみたいですからね」

もうそれぞれ部活に入っているライナーとベルトルトとクリスタとユミルとデミウルゴスだが、仕方なく調査団に掛け持ちと言う形になる。

それでもこうしてエレン達19人は調査団に入った。

次の日。

廊下の掲示板に「エレン・イエーガー。ミカサ・アッカーマン。アルミニン・アルレルト。ジャン・キルシュタイン。コニー・スプリンガー。サシヤ・ブラウス。AINZ・ウール・ゴウン。アルベド。佐藤和真。アクア。ナツキ・スバル。エミリア。ターニヤ・デグレチヤフ。ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴァ・セレブリヤコーフ。以下、14名を壁美化部に強制入部とする。」の張り紙。

「「「なんだ」りやああああああああああ!!」」

ミカサ以外のAINZ達全員は大声を上げて驚いた。昨日、キースに入部届を提出したのに、なぜか壁美化部という妙な部活に入れられたから。

丁度、そこにデミウルゴスとハンジがやつて来て張り紙を見る。

「やはり、思った通りでしたか？」

「デミウルゴス…思つた通りとは一体?」

「アインズ様、言つてませんでしたつけ？調査団は闇の学園組織と」

「え？」

「ようするに、非公認だから入部申請が受理されないって事」

デミウルゴスとハンジが調査団は存在しないので入つても、入部した事にはなれないと説明。当然、調査団のメンバーもちろんとした部活に入つていた。リヴァイとミケは家庭科部で、ハンジとモブリットは生物部。オレオとペトラはテニス部で、エルドは映画研究部でグンタは水泳部。

この真実を知ったエレン達が行つた行動。

三

ただひたすら叫ぶしかなかつた。

きゅうぎ大会、進撃学園その1

「え？じゃあ、AINZは異世界からこの世界に来たのか!?」

昼休み中の教室でAINZが、自分達はこの世界に転移したとエレンとミカサとアルミンに告白。

「道理で…なんか周りと少しおかしいと思つてたけど、もしかしてスバルさん達も？」

「恐らくそうかもしないな…だが、信じてくれ嬉しい限りだ」

などと少し安心して笑い出すAINZ。だが、そこにカズマとスバルがやつてくる。「なあ、せつかくだから3組を見に行こうぜ」

「3組つてライナー達のいる？」

「そうだ。せつかくだし隣のクラスを見に行こうぜ」

3組の様子を見に行くと誘つて来た。とりあえず暇なので、AINZとエレン達は誘いに乗つて3組の教室を覗いてみる。

「「な?」」

突然、AINZとスバルとカズマは3組を見て驚いた。なぜなら教室にはライナーとベルトルト達はいるが、このすば側のクリスとRe:ゼロ側のラインハルト・ヴァン・ア

ストレアとユリウス・ユークリウスとフェルト。さらにオーバーロード側のプレアデス達と、ヴィクトイムとエクレア・エクレール・エイクレアにペストーニヤ・S・ワンコがいたから。当然、制服姿。

「おいおい、なんでラインハルトが…」

「プレアデスまで」

「しかもクリスもいるぞ…」

「あの…」

「「「ん？」」」

すると声がかけられたので振り向いてみると、そこにはゆんゆんとフェリックス・アーガイルが立っていた。

「ゆ…ゆんゆん！」

「フェリス！」

「どうもどうもスバルきゅん♪」

「やつぱり、カズマさんですね！それで私の宿命のライバル、めぐみんも？」

「まあ、いるけど…後ろにいるのは？」

カズマは2人の後ろにいる金髪で片目が隠れている女性に尋ねてみる。

「彼女はアニ・レオンハート。私とフェリスの友達になつてくれた人の1人です」

「え？ お前に友達が…」

「はい！ ようやく…私にも友達が！」

今まで友達がいなかつたゆんゆんにとつては泣くほど嬉しかった。当然、カズマも驚いてしまう。

「まさか…お前までこの世界に」

「本当だよね。でも、こうしてスバルきゅんと会えただけでも嬉しいし♪」

相変わらず何考えているのか分からぬフエリスに少し戸惑うスバルだつた。しかしアニはエレンにきつい顔をして睨む。

「エレン・イエーガー」

「ん？」

「明日の競技大会のドッヂボールで、全力でお前をつぶすから覚悟している」などとエレンに宣戦布告して言つて3組の教室に入つたアニ。

「あっ、待つてアニ！」

「じゃあ、また明日ね♪」

慌ててアニの後を追いかけるゆんゆんとスバルに手を振るフエリス。

「……なんか、あのアニって子はエレンに恨みを感じているようだが？」

「いや、俺なにもしていないぞ！」

AINZが尋ねるがエレンは否定したが、本人が知らないのも当然。

それは入学式から次の日の事。登校して席に座るアニにクリスタが近づいてきた。

「ねえ、アニは好きな食べ物はある？私はアイスクリームとイチゴ♪」

「え？ 私は」

「昨日のチーハン野郎には笑えたよな」

「う！」

言おうとした瞬間、後ろの生徒の話を聞いて固まってしまう。

「たしかに、チーハンは美味いけどあそこまで必死にならないよな？」

「ほんとだよな。執着しそぎ」

などと昨日のエレンの話で盛り上がっていたが、アニは汗をかき続ける。じつはアニの好物はエレンと同じチーズハンバーグだった。

「ねえ、アニ？ どうしたの？」

「え！」

するといつの間にか自分の周りにはライナーとベルトルトとユミルとゆんゆんとクリスとフェリスと、さらにはユリ・アルファとナーベラル・ガンマとループスレギナ・ベータとソリューション・イプシロンとシズ・デルタとエントマ・ヴァシリツサ・ゼータが集まっていた。

「どうしたんスか？」

「それが、好きな食べ物を聞こうとしたら？」

「あ：いや、私の好きな食べ物は」

このまま正直にチーズハンバーグと答えてしまつたら笑われてしまうと思ったが、嘘をつくのもダメなので考えた末。

「も、す、ぐ？」

「随分と変わったものが好きにやんだね？」

仕方なくアニは二番目に好きなもずくと言つてしまつた。 という訳で、アニがエレンを敵視している理由はくだらないもの。

それから、球技大会当日。

「いいか！球技大会は、体育祭と文化祭と並ぶ重要なイベントだ！1年はドッジボールだから、チームワークが肝心だ！」

ジャンが4組全員に指揮をしていた。

「ここで大活躍して優勝すれば、女子にモテモテ間違いなしだぜ」

とても不純な動機でやる気満々。

ちなみに内野と外野の組み分けは、4組内野。エレン、アインズ、アルベド、カズマ、

アクア、スバル、エミリア、ターニャ、シャルティア、ミカサ、アルミン、ジャン、コニー、サシヤ、マルコ、アウラ、グランツ、ヴィーシャ、コキュートス、ダクネス、めぐみん、レム、ラム、ヴァイス。

4組外野。ベアトリス、フランツ、ハンナ、ノイマン、ケーニッヒ、マーレ、デミウルゴス。という形になっていた。

「なぜ、あんな小物が指揮を」

「本当だナ。AIN兹様ニ無礼ナ言動ヲ」

「2人共、ここは落ち着け」

ジャンに不満を感じるアルベドとコキュートスにAIN兹が落ち着かせようとする。

「まあ、ここは水と勝利の女神のアクア様が、見事に優勝させて見せるからね！」

「そうです！ 我が爆熱魔法で炸裂を！」

「お前らも落ち着け！ とくにめぐみん！」

カズマも色々と危険なアクアとめぐみんが暴走しないようにする。

「参加条件は全員参加！ みんな揃つてるな？ さあ、俺のモテ伝説の始まりだつて？」

だが、ジャンは気づいた。エレンがいない事に。

「アルミン、エレンは？」

「……ゴメン、寝坊して遅刻するみたい」

アルミニンは来る前にエレンの家から電話が着て、エレンがまだ起きないとの彼の母親のカルラから連絡を受けた。

それを聞いたジヤンは

「エレンのアホおおおおおおおお！俺のモテ伝説がああああああ！」

こんな時に寝坊して遅刻したエレンに強く怒鳴り叫び騒いだ。

「あの、そんなに大声上げても仕方ないですし…」

ウアイスがなんとかシャンを落ち着かせようとする

「何やら騒がしいな…」

「げつ!!」

「エレン・イエーガーがいない事と関係があるのか？」

キースが強い気迫と一緒に睨んで近づきながら訪ねてきた。当然、エレンが遅刻したなんて言える雰囲気じゃない。

ミカサがサシヤとめぐみんに変な形で責任を押し付けた。

「なんだ？ 貴様らか」

「ああ…その…」

そのまま2人を睨むので思わず涙目になる。

「少しは慎め」

軽く注意しながらこの場から離れた。だが、キースは再び立ち止まる。

「だがな。もしも1人でもサボつたものがいたら…貴様らともどもを巨人の餌にするからな」

改めて全員に行つて立ち去つた。これには流石に恐怖を感じる。

「ここは絶対にエレンがいないことを、気づかせないようにしないとな」

ターニャは念入りに言うので全員は思わずうなづく。

とにかくドッヂボール大会が始まつた。最初は1組対4組。

「さあ、ドッヂボール大会だ！」

そこにジャージで無精ひげの中年が開催を宣言。

「ハンネス先生」

「よう、ミカサにアルミン！」

「知つてるの？」

「はい、ハンネス先生は小学校の時の僕らの先生だったの」

ハンネスはかつてエレン達が通つてた小学校の担任で、今は進撃学園の体育教師をし

て いる。

そしてハンネスが真ん中でボールを持つと、両チームは構える。

「始めるぞ：準備は良いな？そりや！」

ハンネスがボールを高く投げると、マルコがジャンプして4組側に入れようとしたが、相手の3組に取られてしまう。

3組の1人がボールを取るとそのまま投げたが、コニーがキヤツチ。

「よつしや！コニーはバカだが、運動はできる。うちの主戦力の1人…」

「行くぞ！それ」

なんとコニーは敵側の外野にボールをバス。

「なにやつてんだコニー！？」

当然、ジャンとターニャはコニーの行動にツッコんだ。

「そこは敵の外野だよ！ドツチのルール分かつてる！？」

「悪いけど、ドツチってなんだ？」

完全にコニーはドツチボールを全然分かつていなかつた。そのまま外野の敵はコニー ボールをぶつけ、ついでにマルコも巻き沿いで当たり2人はアウト。

「うんうん…ところで、内野つてなんだ？」

外野でマルコはドツチボールのルールをコニーに教える。

「まさかコニーが想像を絶するバカだつたとは…」

ターニャは改めてコニーのバカさに怒りを通り越して信じられずにいた。とにかく再び3組がボールを投げる。

「ここは私が！」

するとここでダクネスがボールの前に飛び出した。

「カズマ、ヴァイス、ヴィーシャ！ アイツを止めろ！」

「ああ！」

「はい！」

「ん？ うわっ！」

だが、すぐにジャンが近くにいるカズマとヴァイスとヴィーシャに向かつて言うと、

「行くよ…それ！」

「なつ！ うわっ！」

そのままボールを相手に投げると、一気に3人も当たつた。

「おい、なんで邪魔を」

ダグネスは邪魔をしたことに不満を持つてジャンに抗議する。

「お前：本当はワザと当たるつもりだつたんだろう」

「なつ、なぜバレた！」

「なぜバレないとと思った？」

ジャンの予想が当たつて驚くダクネスだが、全員分かっていたとうなずく。

「このドツチボールは、まさしく私にピッタリと言うのに…だが、顔面はセーフと聞く。だから、今度来た時は顔面に向けてやる！さあ、来い！私にボールを」

「絶対にアイツにボールが投げてきたら、押さえようにな」

「はいはい」

興奮して相手の3組にボールをぶつけてこいと変な要求をするダクネスに、ジャンは念入りにカズマに頼み込む。

「全く…あそこまでのドMだつたなんてな…まあ、それ以上の変人はもういないはず…」「ちょっとサシヤ！アナタ何やってるの！」

アクアは驚いて声を上げているのでジャンは見て見ると、なんとサシヤがラーメンをすすつていた。

「ラーメンを食べているんですけど」

「いや、そのラーメンはどこから!?」

「校門の前に屋台がありましたので、そこで」

「てか、なんでここで食べてるの!?」

「冷めて伸びてしまつては元の子もないで、今食べるべきだと」

訳の分からぬ理屈を言つて食べ続けるサシヤで、ジャンはしばらくしてズコーっと抜けた。

だが、3組はラーメンを食べて隙だらけのサシヤにボールを投げる。

「サシヤ、危ない！」

エミリアが叫んだがサシヤは華麗に避けた。

「なに！このやろ！」

外野側の3組が驚きながらボールをキャッチして投げたが、それでもサシヤはラーメンを食べながら避け続けた。この光景にAINズ達も驚く。

「そうか！サシヤの食事の邪魔はできないんだ」

「「「だつたら、手を使つてボールを投げてもらいたい！」」」

アルミンはサシヤの食べ物に対する情熱を理解したが、もつとちゃんとドツチボールをしてくれとジャンとAINズとスバルとタニヤはツツコむ。

しかしアルベドとシャルティアやレム達の、活躍のおかげで何とか有利になる。

「やれやれ、なんとかなりそうだな。それにこつちにはミカサもいるし…」

ミカサはアルベド達程ではないが、身体能力は4組でもトップクラス。なので勝利は

確實の事。

「えい！」

3組の女子が精一杯ボールを投げたが、弱弱しい勢い。

「バカめ！そんなへなちょこボールがミカサに当たるはず！」

だが、ジャンの予想とは裏腹にボールはミカサに当たる。しかもそのままミカサはバタつと倒れた。

「あれ！ なんで！？」

「どうして！弱くなつて！？」

ジヤンもカズマ達も弱くなつたミカサに驚くと、アルミンが語り出す。

「ゴメン…じつはミカサは朝から一定時間エレンに会わないと、スペックが30%も落ち込むんだ」

この事実にジヤンはもちろん、AINZもカズマもスバルにターニヤは驚く。

かつてエレン達が小学5年の頃。臨海学校の時に、エレンがインフルエンザにかかりしまい休んだ。そのせいでミカサは物凄く落ち込んで、小学生とは思えないほどの哀愁を漂わせる。これが他の生徒に影響して、エレン達のクラスが暗い臨海学校となつたとか。

「この世界は残酷だ…」

外野でも哀愁を漂わせるミカサに、流石のベアトリスやデミウルゴスも引いていた。
「なんなんだよ、このチームは…自分から当たりに行こうとする奴と、ラーメンを喰つ
ている奴と、ドツジのルールを分かつていない奴と、強い哀愁を漂わせてくる奴…」

4組のメンバーが完全に変人揃いで心底後悔するジャン。4組の勝利は分からぬ
ままだつた。